



足るを知る

今年に入ってから、アメリカのサブプライム問題に端を発しての世界同時株安の中で日本株の低落が著しい。

かつての「失われた十年」を経てもなお、経済の低迷は続き、今では我が国のGDPの世界経済に占める割合は10%を切り、かつての経済大国の面影は既に消え去っている。

その中で「格差社会」と言われるように「富」のアンバランスが指摘され、実際に生活保護世帯はこの15年間に2倍の110万世帯となり、生活保護費は2兆6千億円に達している。

この生活保護を含めワーキングプアなどの貧困の救済は政治における大きな課題となっている。

他方、政治家、官僚の腐敗、老舗の詐欺まがい行為の続発、親子、夫婦間を含めた庶民層の信じられないような凶悪犯罪など、モラルの退廃現象も著しい。

確かに「この国はおかしくなっている」。何故か。

それは一にかかって、戦後の物質至上主義、そして「公」と「他」を考えることなく、いたずらに自らの生活便益の拡大を追及する風潮が多く欲望を生み、その欲望を満たすための「物」の過剰によって人間の生き方が狂わされてしまったことによるものである。

10年前に草思社から出版された中野孝次氏の「清貧の思想」がベストセラーになったことがあるが、それは本阿弥光悦、良寛、蕪村、芭蕉、鴨長明（方丈記）、吉田兼好（徒然草）などの歴史上の人物の著作、生活、言行などを紹介して「かつてこの国にあった文化の一側面」を強調するものであった。

その「清貧の思想」とは、利を求めず、貧を憂えず、俗気を去り（脱俗）、所得の欲望から自らを解放すれば、心が自由になり、豊かになるというものであった。

そうした「簡素な生」の中で人間の品位と高貴な心が生まれていくのが日本の文化の伝統であった。このことは既に平安中期（10世紀）に、学僧「源信」が「往生要集」において、「足ることを知らば貧といえども富と名づくべし、財ありとも欲多ければ、これを貧と名づく」と喝破している。

これはまた、中国の老子が「足るを知る者は富む」と言っているのと同意義であって欲を捨て現状に満足することができる者は、精神的に豊かでいられるのである。

経済が低迷し、モラルも崩壊し、行き先不透明な現状においては、いたずらに「利」と「所得」を追い求め生活の便益向上のみを望むよりは、むしろ「足るを知る」境地で自らの心の生活を充実させることを目指すべきではないか。

禅の言葉に「日々是好日」ということがあるが、「清貧」に徹し、お互いがかけがえのない一日一日を大切に感謝の気持ちで過ごせば、自らの品位が高まり充実した人生を送れること必定である。